

日常の中の改革者たち ①

覚悟の骨髄移植



橋爪大三郎

アメリカでショッキングな骨髄移植の事例が報道されて、反響を呼んでいる。

それは、ある家族の選択だった。両親と暮らす一人娘アニサさん(19歳)は白血病で、長くてもあと5年の命と、医師に宣告されている。唯一の効果的な療法は、健康なドナー(提供者)から骨髄を移植することだが、白血球の血液型が合致しないと手術ができない。合致する可能性は、一般人の場合、数百分の一、数万分の一。しかも検査に多額の費用(一人数万円)と手間がかかるため、ドナーを見つけるのは容易でない。みすみす生存の可能性が分かっていながら、生命を落とすケースも多い。

近親であれば、血液型が一致する可能性は、飛躍的に高まる。たとえば、親子なら二分の一、兄弟姉妹なら四分の一。そこで両親は、残念ながら自分たちと血液型が一致しなかった娘の生命を救うため、もう一人子供をもうけることに決めた。生まれて来る子の血液型が上の娘と一致する保証はないが、四分の一の可能性に賭けたのである。妻も五十の声を聞こうという夫婦。普通ならあえて子供をもうけようとは思わない年齢だ。幸い、月満ちて生まれた女兒

は、血液型が適合して骨髄移植可能だと判明する。その妹が、手術に耐える満十三カ月となるのを待って、先ごろ移植が行なわれたのだった。

骨髄移植手術は、数日間の入院を要するうえ、ドナーにも苦痛をとまなう。けれども術後、ドナーは急速に回復し、後遺症もない。無害であるという点では、生体肝移植などと異なり、むしろ輸血に近いと言わべきだ。

家族内に適合者が見つければ、ドナーとなるのはまったく自然である。今回、両親が妊娠の経緯に口をつぐんでいれば、大騒ぎにはならなかった。ところが、両親が事前に、事実を発表してしまった。そのため、新聞やCNNなどのニュース枠で、大々的に報じられることとなった。日本でも6月5日のニュース・ステーション(テレビ朝日系列)がCNNの報道を紹介するなど、多くの人びとの関心を集めた。

今回の報道に接した日本人の平均的な反応は、赤ん坊を骨髄移植の道具にしてしまっているのか、という反発だったようだ。ニュース・ステーションでもそのようにコメントしていたし、何人か知人に聞いてみた結果もそうだった。

姉の命を救うために妹を産んだのでは、差別にならないかとか、妹が成長したあと、心に大きな傷を負うのではないかと、と危惧する声もあった。

もの心のつかない幼児からの移植は、問題を孕んでいる。ドナーである幼児が、本人の客観的な状況を認知できず、自分の利益を主張することもできないからだ。本人に代わって幼児の利益を守るのは、本来なら両親であるが、今回の場合、両親は姉の利益も代表しており、その両方を「総合的に考え」て骨髄移植を選択したことになる。ドナーの「同意」があったことになるのか、微妙である。

しかも今回の事例は、「家族内にドナーが幼い妹しかいなかった」のではなく、「家族内にドナーがいなかったため、あえて幼い妹をもうけた」という、一歩踏み込んだ選択である。この点に、違和感が集中している。「骨髄移植のために、この世に生まれる人間があつていいのか」という違和感だが、ここから、両親の選択に疑問を投げかける声が多い。

姉の生命を救うという動機には異論の余地がなくても、そのためにもうひとつの生命が左右されるのでは、釈然としない気持ちになる。

けれども私が思うに、今回の事例の核心は、そうした違和感の先にある。両親は、自分たちの選択を正しいと思えたからこそ、意図的に妊娠したと発表し、記者会見までしているのだ。姉に骨髄を移植するため妊娠しているのか、といった初歩的な疑問を考え尽くして、結論に到達したに決まっている。そこに至る両親の苦悩を理解しないと、事件の重みを受け止めたことにならない。

もちろん両親は、まず通常の方法でドナーを探した。もしも骨髄バンク(血液型の登録システム)が利用できれば、ドナーを見つければ難しくない。けれどもそれがまだ不備なので、砂漠のなかから一本の針を見つけないといけない。そこで苦悩の選択があつた。患者と家族を待ち受ける厳しい現状に注意をうながすことこそ、記者会見ま

好評発売中

国立国会図書館蔵書目録 (主題別・分売可)

第三期 (昭和44年～51年) 十二冊定価合計二九九、九三六円(一部品切れ)

第四期 (昭和52年～60年) 十七冊定価合計一九六、七三〇円(一部品切れ)

洋書編 (昭和23年～60年) 全九冊、刊行中、予定価各五〇、〇〇〇円

図書館に必備の基礎資料です。一部品切れあり。お早めにご注文下さい。

紀伊國屋書店

(新館) 〒156東京都世田谷区 桜丘5-38-1
営業推進部 03(3439)0171
ホールセール部 03(3439)0128

でした両親の狙いだった。

幸いドナーとなる妹に、健康面で悪影響が及ぶ心配はほとんどない。医師と相談し、そういう説明を受けたのだらう。もともと、無害とは言っても、ドナーとなることにさしあたり何のメリットもない。それを本人(赤ん坊)の「同意」なしに決めてよいのか、という問題が残る。生命の危機にある姉と、とりあえず健康に育ちつつある妹。ここは姉を優先させるのが正しい、と両親は判断した。

最後に残った難問は、生まれて来る子にとって人生が生きるに値するか(幸せな人生であることを保証できるか)、という問題だったに違いない。

もともと姉の生命を助ける動機で妊娠したのに、いまさら妹の幸福が保証できるのか。

まず、子供の幸せとは何か。成人してからは本人に任せるとして、子供にとっては、望まれて家族に迎えられれること、これにつきると思われる。だから妹は、別の誰かのためではなく、彼女自身のために生まれたと信じる事ができなければならない。

それには、両親がまず、そう信じることだ。たまたま姉が白血病にかかったから……というきっかけはともかく、移植ができる可能性はたかだか四分の一。残り四分の三は、姉の生命を救う役に立たないのである。それでも生まれた子供を愛せるか? 姉と変わりなく愛することができる、と両親は思った。これは開き直りかも知れないが、そこまですべてで考えることで、「白血病の娘をかかえた気の毒な家族」で

はない、自分たちの家族を再発見できる。妹の誕生を素直に喜び、家族の一員として迎えよう——そういう覚悟ができたからこそ、両親は子供をもうけることを正しいと確信できたに違いない。

若い夫婦が子供をもうけるのは自然だが、それもやはり選択である。子供に十分な経済的、家庭的環境を与えてやれるなら、それはよい選択である。だから、もう若くない夫婦でも、同様に望ましい環境さえ与えてやれるなら、それも同じくよい選択であろう。いや、もつと価値ある選択だと言えるはずだ。愛が子供の誕生を、正当化する。とりわけこの子供は、生まれてすぐ、姉の生命を助けるという貴重な「隣人愛」の機会に恵まれるかもしれない。両親がこれらすべてを考えつくし、世間の誤解や非難を克服する覚悟をしたことを、われわれは見るべきなのである。

彼らの選択を第三者が、「子供を移植の道具扱いするな」みたいな言い方で批判したつもりになっているとしたら、それは彼らをみくびるものだ、と私は思う。

まず第一に、今回の事例は、「人間を移植の道具扱いしない」という倫理を当然とし、しかもその上で何ができるかを考えた、ぎりぎりの選択である。

移植技術が進歩したため、人間の身体は事実上、互いに「道具」のように利用可能になっている。その事実を認めたいので、そこに新しい倫理や行動規程を築きあげること。それは、苦悩する当事者でなければできないことだ。難病の姉を抱え、年の離れた妹を育て、衆目監視のなかをこれ

からの年月、家族として生き抜いていくのは、彼らであって第三者ではない。自分がその立場だったらどう行動するか、と自分に問い返すことなしに、こうした問題について発言しても無意味である。

第二に、この事例から、家族の絆がもつと開かれたものであっていいという感覚を学ぶことができる。

同じころ日本で、いたましい心中事件が報じられた。白血病を病む息子と看病に疲れた母親が、自動車ごと海に飛び込んで心中した、という事件である。この家族は骨髄移植のドナーを探すのに数千万円の費用を負担しており、「励ます会」の人びとの寄附で半額程度をまかなったものの、経済面、病状面で展望が見出せなくて、苦悩した果ての結末だった。

家族の絆を自然で宿命的なものと考えてしまえば、いざというとき心中に走りたくなる。家族の絆を市民社会に広げることが難しくなる。移植の可能性に賭けて子供を生む

という、一見ドライで大胆な行動がとれたのは、ドナーとなってくれる市民を、家族の一員として迎え入れようという発想から生まれたものだ。家族と市民を、このように連続的に考えていいのだ。こういう感覚から臓器移植をめぐる公共倫理も育まれるように思われる。

逃れる術のない個人的不幸に見舞われたとき、ひとは運命を呪い、苦しむ。精一杯努力をし、それでも途が開けないとき、どう行動するか。もうひとり子供を生む、という選択をした夫婦は、その理性と勇氣において、尊敬に値すると私は思う。問題を解決するための行動で、法と道徳が許すことであれば、過去に例がなくても、そして世間が何と言おうと、恐れず実行する勇氣。われわれは日常、数々の個人的不幸に翻弄されている。それにどこまで原則的に立ち向かうかが、その人間の人生の価値を増していくと思ふのだが、どうだろう。

(はしづめだいさぶろう・東京工業大学助教授・社会学)

杉山二郎(佛敎大学教授)著 初学者のための手引書

日本彫刻史研究法

重要文化財・東京国立博物館所蔵・江戸幕府道中奉行所編修

佐屋路分間延絵図

全1巻

彫刻を造形を含め政治・経済史、歴史地理学等から多角的に解析する方法を天平〜江戸に分け開陳。彫刻史俯瞰・文献の解釈法・仏像の見方・地図の読み方等、付録も充実。カタログ送呈。写真図版185点・本文400頁 定価14,420円

監修 児玉幸多 解説 加藤安雄 小杉正 杉本嘉八 東海道の脇往還・佐屋路は尾張藩が整備した歴史ある道。本書は岩塚宿・佐屋宿の史跡を現地取材した詳細な解説篇と彩色の精緻な街道絵図篇二冊セット構成。豪華装幀 定価37,080円

〒101 東京神田司町2-7 03(3292)3231 価格税込 東京美術

法と不法を切り分ける勇氣

橋爪大三郎



〔長崎県雲仙・普賢岳の噴火災害で全国から島原市と南高来郡深江町に送られた義援金のなかに、広域暴力団山口組の幹部名義のものが含まれているということが四日わかり、長崎県警は両市町から事情を聴き確認を急いでいる。同県警や兵庫県警は「暴力団の取り締まりを強化した新法の適用を免れようとした売名行為ではないか」と警戒している。〕(朝日新聞七月四日朝刊)

この記事によれば、問題の寄付は、島原市に会社名で百万円、深江町に個人名で一千万円。前者は、兵庫県警が山口組系とマークしている会社からだという。同紙は続けて、〈島原市の肘井(ひじい)京二市長公室長は「義援金を受け取るのに、相手のことをいちいち調べてはいない。いまさら返すつもりはない」という。〉と報じており、順に読めば、暴力団からの寄付を返還したほうがいいと、強く示唆する流れになっている。

しかし、暴力団からの寄付は受け取らないのが正しいのを受け取るべきでない、と考えているのは、まずこの記事か？

を書いた記者。そして、警察(長崎県警と兵庫県警)だ。恐らく、高額の寄付者の身元を洗い出さうと、それが山口組関係者であることに警察が気付いたのだろう。この情報を聞きこんだ朝日の記者が、島原市と深江町に取材して、今回の記事になったものと思われる。

どんな取材をしたのか書いてないけれど、記者はたぶん、こんなふう質問したはずだ。「山口組と言えば、暴力団のなかの暴力団。その関係者から、金銭を受け取っていいんですか。国会で暴力団新法が成立したので、焦った彼らは、少しでもイメージをよくしようと、噴火にかこつけて義援金を送ってきたのに違いない。これを受け取ると、山口組の生き残りに手を貸したことになりますよ。……」率直な正義感からの質問だろう。問題はその正義感が、みりあるものかどうかだ。

百万円、一千万円といえば大金だ。いままず災害対策を講じなければならぬ自治体には、喉から手が出るほど有難い。だから記者が、「寄付を返すつもりがないのか」と聞いても、すぐにはハイと言えなかった。自治体は、被害に

あつた住民にできるだけのことをする義務がある。金が必要。寄付を断つても、朝日の記者が代わりに用立ててくれるわけではない。

問題の人物が山口組の関係者だとして、彼は果して、取締りを逃れるための〈売名行為〉として、義援金を送ってきたのだろうか？

そうとは限らない、と私は思う。暴力団員だろうと誰だろうと、柄にもなくとつきによいことをしてしまう、なんていうのはよくある話だ。だとしたら、彼はこの記事を読んで、ひどく傷ついたことだろう。ひとの善意をいちいち売名行為かと勘ぐるのは、あまりにも温かみのない考え方という気がする。

しかし言いたいのは、そういうことでない。よしんば〈売名行為〉だったにせよ、それが寄付を断る理由にはなるまい、ということである。なぜなら、寄付行為そのものは、

法に触れていないからだ。

寄付というものと、その受け取り方について、ここで少しまとめておく。

たとえば、教会で廻ってくる献金箱は、どういう意味があるか？ これは、教会に必要な経費を信者がみなで負担するための寄付で、各人がその能力に応じて献金する。その際、彼が犯罪者であるかどうかなど、いちいち詮索しない。人間はみな罪深いものだから、そういうことを言い出せば、誰も献金できなくなってしまう。しかもそこに、売名行為の余地はない(誰がいくら献金したかも、判らないようになっていく)。教会は、暴力団だろうとマフィアだろうと、世俗のどんな団体にも左右されない宗教的な権威を持っている。そして、犯罪者であろうとなかろうと、すべての人びとの魂を救済することに関心を持っている。だから、誰がいくら献金しようと黙って受け取る。そして、沢山献金

万葉の風土と歌人

万葉歌人と自然景観
犬養 孝編 ●定価3,880円

探訪 日本書紀の大和

古代の息吹き・大和路散策
井忠義著 ●定価1,980円

下着の流行史

下着にみる時代と風俗
青木英夫著 ●定価2,880円

増補改訂 ポーランド音楽史

もうひとつのポーランド
田村 進著 ●定価2,950円

音の文化誌

聴覚文化の東西比較
佐野清彦著 ●定価1,980円

鉄の文明史

鉄にまつわる壮大なロマン
窪田蔵郎著 ●定価1,980円

日本名茶紀行

日本のティーロード
松下 智著 ●定価1,980円

●価格はすべて税込みです。

雄山閣 千102 東京都千代田区
富士見2/5 電話・東京3-
1685 / 03-3262-3231

したからといって、特別扱いされるわけではない。仏教の場合も考えてみよう。

僧侶の生活を支えるのは、在家信者の寄付(布施)である。在家信者とは、煩惱に迷う衆生(一般の人びと)だ。寄付行為は、そんな彼らが善行(功德)を積むチャンスである。だから僧侶は、寄付をなるべく断らないようにした。たとえば、僧侶自身は、殺生戒を守っているから動物を殺すことはないけれども、在家の人びとから肉料理の布施を受ければ、嫌がらずに食べた。布施するためにわざわざ殺生をしたり、悪事を働いたりするのはいけないが、そうでないかぎり、信者が日常食べる食事の布施を拒む理由はないのである。

地方自治体は、宗教団体ではないけれども、寄付を受けるかどうか、似たように考えればよいと思う。

地方自治体の目的は、住民の福祉を実現すること。暴力団を取り締めることではない。問題は、集まった財源を正しく公平に使うことであって、寄付したのが誰かをいちゃいちゃ詮索しないでいい。それは国家が、税金の出所をいちゃいちゃ詮索しないのと同じだ。

もちろん、自治体の行政権限に手心を加えてもらおうとして金品が渡されたのなら、話は別である。でもそれは、暴力団でなくても、一般の市民でも同じこと。立派な犯罪行為(贈賄)だ。寄付は犯罪でないから、こういうケースと一緒ににはならない。

とはいっても、私は、暴力団を弁護したいわけではない。暴力団がいけないのは、当たり前のこと。ただ、寄付を断るなんていうことより先に、打つべき手は山ほどある、と言いたいのだ。

暴力団がなくならない根本の原因は、暴力団を(心ならずも)支持してしまう一般の人びと(市民)が大勢いるからである。そこを問題にしないで、暴力団の寄付を何回返還させてみても、何の解決にもならない。いやむしろ、有害でさえある。暴力団と聞くだけでむやみに神経質になるのは、不法行為とそうでない行為の間に、はっきり線が引けていない証拠だ。そんなことだから、暴力団が生き延びてしま

うのだ。

暴力団とは何か。目的のためなら、不法行為(暴力)を辞さない人びとの集団である。

一般の人びとは、あえて不法行為(暴力)に訴えようなどと、ふつう思わない。だから、暴力団と正面からわたりあおうとしても、まず勝ち目がない。そこでやむなく、払う必要のない金銭を相手に渡して解決を図ることにもなる。特に何か弱みがある場合、暴力団につけこまれてしまう。こうしたやりとり(脅し)から、彼らは法外な利益をうるのだ。

不法行為に対しては、法的にきちんと対抗措置を講ずる。これが、もつとも原則的な対処の方法だ。

暴力団は自分の正体を相手にちらつかせて、そこから利

益を手に入れようとする。だからその際、暴力団ではない一般の人びと(法を守るべき市民)の誰かが必ず、彼らの不法行為を知る立場に置かれるはずだ。そうした人びとが、すかさず彼らの不法行為を問題にできるかどうか。すべてのカギはここにある。

世の中には、暴力団を利用して、株主総会を乗り切ったり、地上げをしたり、示談をまとめさせたりと汚い仕事をさせ、自分は何に喰わぬ顔という、けしからぬ企業がある。一流企業も例外ではない。たまたまその事情を知りえた社員が、それにはつきりNOと言うこと。さもなければ、暴力団がなくなるわけがない。

資金源に加えて、人的な供給源を絶つことも重要だ。いわれない理由で就職チャンスを奪われたり、日常的な差別を感じたりして疎外感を味わうことが、不法な集団に加入する動機になる。ほかに居場所のない人びとが集まる

ので、こうした組織は存続する。逆に言えば、暴力団を構成する人びとが合法的に行動した場合、周囲の人びとがそれを評価できないと、彼らは「足を洗う」こともできない。暴力団員も、子供を学校にやる人の親。病気になるれば医者にかかり、食料品をスーパーで買うふつうの人間なのだ。法を犯さないかぎり、彼らも平穩に生活を営む権利がある。暴力を憎むあまり、彼らの一挙手一投足を毛嫌にするのは幼稚な態度だ。

先の記事を読んで、私は、日本の警察や新聞記者が、組織暴力と不法行為を根絶するための、きちんとした方法論を持ち合わせているのか、疑問に思った。不法行為でも何でもない寄付を、特定の人間のことだからといって、問題視するのは、差別でなくて何だろう。差別は、暴力団を結束させるだけである。

(はしづめだいさぶろう・東京工業大学助教授・社会学)

三一書房

映像の探求

制度・越境記号生成

松山俊夫

2500円

映画史を振り返り、映像芸術の魅力とその今日的な創造課題を(考える)意義は大きい。映画を制度の呪縛から解放し、その豊かな契機を押し広げるために(著者)

寺山修司

リバイバルシリーズ

遊撃JUNKの誇り

才気溢れる言葉の弾丸が時代を撃つ! 映画・ボクシング・歌謡。鬼才の処女評論集復活!

2400円

けんかえれじい 鈴木清順

リバイバルシリーズ

2800円

〒113東京都文京区本郷2-11-3 電話(03)3812-3131